

いじめの認知と対処法：女子のいじめ体験に着目した質的研究

Perceptions of Bullying and Coping Strategies: A Qualitative Study
Focusing on Bullying Among Girls

山田 啓太 (Keita Yamada) 指導：菅野 純

【問題と目的】

女子児童生徒に見られる心理的ないじめの見えにくさや複雑さゆえに、女子のいじめについては質的にその特徴を検討する必要がある。加えて菅 (1988) の示すように、情緒不安定を代表とする思春期特有の女子の心性も考慮した、女子の心理的ないじめの認知と対処法に着目し、その認知と対処がいじめ体験にどのような変化や影響を与えたのかを検討した研究は見られない。以上の理由から、女子のいじめ体験者のいじめに対する認知と対処法を丁寧に見ていく事が、今後のいじめ対策を教育や臨床現場において考えていく上での一助になると思われる。

よって本研究では、調査1においていじめ体験についての質問紙調査、そして調査2において女子のいじめとその認知と対処法に焦点をあてたインタビューを個別的に見ていき、女子のいじめの認知と対処法について検討していくことを目的とする。

【調査1：方法】

アンケート調査は大学の講義終了後に質問紙を配布した。独自項目によって構成された選択および自由記述式の質問紙を用いた。調査対象者は大学生203名、内訳は、男性94名、女性101名、平均年齢は19.5歳 (18歳から23歳) であった。データは単純集計し、自由記述は内容分類した。

【調査1：結果と考察】

いじめた経験、いじめられた経験、いじめの傍観体験のいずれも、男女間に大きな差はみられなかった。女子に着目すると、いじめられた経験の割合がいじめた経験の割合よりも高い。このことから、いじめを受けたという側が、相手がいじめとは考えていないような仕草や言動態度からそれをいじめであると認識している可能性があることも考えられる。男女ともにいじめた経験、いじめられた経験、いじめを目撃・いじめの相談を受けた経験のいずれも小学校高学年頃から中学校に多く見られた。その理由として、小学校高学年から中学校にかけてみられる第二次性徴の影響が考えられる。心理的ないじめである「無視・しかとされる」「仲間はずれにされる・避けられる」は男性よりも女性

に多くみられている。さらに「グループでのいじめ」に関しては男性が3人であるのに対して女性は11人であったことは、Scheithauer他 (2006) が示すように、女子は、心理的いじめによってグループ内の被害者側の自尊心を破壊しようとする特徴があることを示唆しているかもしれない。

【調査2：方法】

①いじめの目撃経験のある、②いじめの被害経験のある、③いじめの加害経験のある、いずれかの経験があり、かつインタビュー調査への協力依頼に応じた女子学生5名に対して、インタビューを実施した。方法には半構造化面接を採用し、分析にはInterpretative phenomenological analysisを用いた (Smith & Osborn, 2003)。

【調査2：結果と考察】

女子のいじめの特徴として、グループ内における無視、仲間はずれ、はぶり、などの心理的いじめと、悪口やからかいなどの言語的いじめが多く見られた。いじめの認知としては、①自己を悲観視せずに冷静にいじめの理由や原因を考えること、②いじめをささいなことであると思うようにすること、の2点が共通して語られた。いじめの対処法は、①友人への相談・他の友人グループへ入る、②親・教師への相談、③登校を続ける・いじめに反応しない、の3点が共通して語られた。

【総合考察】

本研究より、いじめに立ち向かうための対策として、①いじめを受けた際に自己を悲観視せず、劣等感にとらわれないといった認知的評価の有効性、②いじめに関わっていない周囲の傍観者の立場に着目したいじめ対策の必要性、③学校や教師が、いじめが起こる前・起きた時・起きた後に効果的な対処できるような準備や態度を備えていることの必要性、④いじめられても反応しない・感情を平常に保つ・登校を続けるといった強さや積極的な受け身の態度の有効性が示された。さらには、学校内の友人や教師、家庭での両親によるサポート、被害者の持つ資質などもいじめ体験に大きな影響を与えることが示唆された。